

内閣総理大臣賞
(金沢地方法務局長賞)

「笑顔のために」

羽咋市立羽咋中学校 1年

藤岡 はるか (ふじおか はるか)

私はかわいそうな子供なののでしょうか。私の家族は気の毒な家族なののでしょうか。

私の両親は、障害者です。父は全く目が見えず、母は全く耳が聞こえません。けれど、私が物心付いた時からそのような状態でしたから、あまり違和感を感じたことはありません。近くに住む祖父母の助けもありましたが、父は鍼灸マッサージ師として働き、母は事務を執りながら私を育ててくれました。確かに急いでいる時に少し困ることもありますが、あとは普通の生活です。私は両親が大好きです。二人は、私の良き相談相手であり、とても頼りになる存在です。

母の障害のことを知っている友達には、時々「どうやって話をしているの」と尋ねられることがあります。母は、文字を読み、私たちと筆談し、私の唇の動きで私の声を聞き、私に話しかけます。母の発声は他の人とは違いますが、私たち家族には、ちゃんと母の声が聞こえます。でも、それをどう説明すればいいのかわからなくなってきました。いくら説明しても、わかってもらえないような気がするからです。

前にもこんなことがありました。近所のおばさんが、通りかかった私に、こんな声をかけてきました。「いつも大変やね。はるかちゃんはえらいね。ようがんばっとるね。かわいそうやね。」と。

『かわいそうやね』。

この言葉が一番ショックでした。私は、大変だとか、かわいそうだとか、不幸だなどとは思っていないのに。確かに両親に障害があるために、多少困ることはありますが、私たち家族のことをよく知りもしない人に、『かわいそう』と決めつけられたのです。両親の愛情も苦労も知らない人に、両親の心を、そして私たち家族を踏みにじられたような感覚でした。同時に、こんな風に同情の言葉だけ掛けて気の毒そうに見る人がたくさんいることが残念でした。『障害者』に育てられることはかわいそうなことなののでしょうか。

そんなことがあって、買い物に出かけた夕方。父と母がスーパーのレジに並んでいるのを見ていて、私は何だかうれしくなりました。私の両親は、父ができないことを母がカバーし、母ができないことを父がカバーして、店員さんと話をしているのです。家の中でい

つも見ていたことなのに、あの時二人の姿を見ていて、「お父さんの目の代わりはお母さん、お母さんの耳の代わりはお父さんなんだ。二人は一心同体だな。」と改めて実感しました。そして、それと同時に、私はこんなにすばらしい親の子供なんだと、本当にうれしく、誇らしく思ったのです。

そして、そんな両親のそばで、弟はにこにこ笑っていました。その弟も病気です。原因は分かりませんが、たまに弟は「こんな風になりたくてなったんじゃないがんに…」と、泣きそうな顔で言っています。病気を治すための第一歩は勉強をすることなのだそうですが、小さな弟は嫌がってなかなか両親の言うことを聞きません。父も母も障害をもっているのです、やはりそんな時は大苦戦です。それでも根気よく弟に話をする二人。困っている二人の姿と、嫌がって逃げようとする弟。私はというと、ついこの前までそんな三人を見て、いい加減にしてほしいと思っていたのです。

仕事の後、弟と一緒に勉強する父に、一度聞いたことがあります。「お父さん、嫌じゃないがん？イライラしんがん？疲れんがん？」すると、父は、「やらなきゃだめなんや。あきらめたらそこで終わりや。」と言ったのです。私はハッとしました。「私は、弟や両親をなんて冷たい目で見っていたのだろう。『障害』をあきらめずに私を育ててくれた両親が大好きなのに、なぜ二人の心を考えようとしなかったのだろう。なぜ弟の病気をあきらめてしまっていたのだろう。」家族なのに、大切な三人なのに…。両親に甘えて、自分のことで精一杯だった私。恥ずかしさで一杯の私の顔が、父にはきっと見えていたことでしょう。

人間は皆平等でかけがえのない存在。よく耳にする言葉です。でも、障害のある人もない人も平等なのだろうかとは私はずっと考えてきました。そして少しずつわかってきたことがあります。

人は、一人ひとりが大切な存在。その人がいることが誰かの生きる力になり、喜びになる。たとえ苦しいことがあっても、その人の笑顔があれば、あきらめずにやっていける。そんな不思議な力がすべての人に平等に与えられているのではないのでしょうか。そして私の家族はきっとそんな力にあふれた家族です。

私は、弟の笑顔を見ているとホッとします。両親の笑顔も、見ているとホッとします。その笑顔のために私が手伝えることは、もっとありそうです。だって私は、二人の娘なのですから。